

# 錦木

古名

# 錦塚

世阿弥作

季は	地は	後	前
秋	陸奥	ワキ ツレ シテ 里男の亡靈	ワキ シテ 里男 里女
		前に同じ	旅僧

「實にや聞きてても忍山。く。其通路を尋ねん。

詞 「是は諸国一見の僧にて候。我いまだ東国を見ず候

ふ程に。此度思ひ立ち陸奥の果までも修行せばや  
と思ひ候。

道行 「何処にも。心とめじと行く雲の。く。旗手も見

えて夕暮の。空も重なる旅衣。おくは其方か陸奥  
の。希婦の里にも着きにけり。く。

シテ、ツレ次第 「けふの細布をりくの。く。錦木や名立なるら

ん。

シテサシ 「陸奥の忍ぶもじすり誰故に。みだれそめにし我か  
らと。

二人 「藻に住む虫の音に泣きて。壁生草のいつかさて。

思ひを乾さん衣手の。杜の下露起きもせず。寐も  
せで夜半を明かしては。春のながめも如何ならん。  
あさましや。そも幾程の身にしあれば。なほ待つ  
事の有り顔にて。思はぬ人を思ひ寐の。夢か現か

寐てか覚めてか。是や恋慕のならひなる。

下歌

「徒に。過ぐる心は多けれど。身になす事は涙川。  
流れて早き月日かな。／＼。

上歌

「實にや流れでは。妹背の中の川と聞く。／＼。吉  
野の山は何処ぞや。こゝは又。心の奥か陸奥の。  
けふの郡の名にしおふ。細布の。色こそ変はれ錦  
木の。千度百夜いたづらに。悔しき頼みなりける  
ぞ。悔しき頼みなりける。

ワキ詞

「不思議やな是なる市人を見れば。夫婦と思しく  
て。女性の持ち給ひたるは鳥の羽にて織りたる布  
と見えたり。又男の持ちたるは美しく色どり飾り  
たる木なり。何れもく不思議なる売物かな。是  
は何と申したる物にて候ふぞ。

ツレ詞

「是は細布とて機ばかり狭き布なり。  
シテ詞  
当所の名物なり。これ／＼召され候へ。

ワキ

「實に實に錦木細布の事は承り及びたる名物なり。  
さて何故の名物にて候ふやらん。

ツレ「うたての仰せ候や。名におふ錦木細布の。其かひ  
もなくよそまでは。聞きも及ばせ給はぬよなふ。

シテ詞「いやくそれも御理。其道々に縁なき事をば。何  
とて知ろしめさるべき。

二人「見奉れば世を捨人の。恋慕の道の色に染む。此錦  
木や細布の。知ろしめさぬは理なり。

ワキ「あら面白の返答やな。さてく錦木細布とは。恋  
路によりたる謂よなふ。

シテ詞「中々の事三年まで。立て置く数の錦木を。日毎に  
立てゝ千束ともよみ。

ツレ「又細布は機ばかりせばくて。さながら身をも隠さね  
ば。胸合ひ難き恋ともよみて。

シテ「恨みにも寄せ。

ツレ「名をも立てゝ。

シテ  
「逢はぬを種と。」

ツレ  
「よむ歌の。」

地  
「錦木は。立てながらこそ朽ちにけれ。く。けふ  
の細布胸合はじとやと。さしもよみし細布の。機  
ぱりもなき身にて。歌物語恥かしや。實にや名の  
みは岩代の。松の言の葉取り置き。夕日の影も錦  
木の。宿りにいざや帰らん。く。」

ワキ詞  
「猶々錦木細布の謂御物語り候へ。」

シテ詞  
「昔より此所の習ひにて。男女の媒には此錦木を作

り。女の家の門に立つるしるしの木なれば。美し  
く色どり飾りて之を錦木と云ふ。さる程に逢ふべ  
き男の錦木をば取り入れ。逢ふまじきをば取り入  
れねば。或は百夜三年までも立てしによつて千束  
ともよめり。又此山陰に錦塚とて候。是こそ三年  
まで錦木立てたりし人の古墳なれば。取り置く錦  
木の数ともに塚に築きこめて。之を錦塚と申し候。」

「さらば其錦塚を見て。故郷の物語にし候ふべし。

教へて賜り候へ。

シテ 「あういでくさらば教へ申さん。

ツレ 「此方へ入らせ給へとて。

二人 「夫婦の者は先に立ち。彼旅人を伴ひつゝ。

地 「けふの細道分け暮らして。錦塚は何処ぞ。彼岡に。草刈る男心して。人の通路あきらかに。教へよや道芝の。露をば誰に問はまし。真如の玉は何処ぞ

や。求めたくぞ覚ゆる。

シテ 「秋寒げなる夕まぐれ。

地 「嵐木枯村時雨。露分けかねて足引の。山の常蔭も物さび。松桂に鳴く梟。蘭菊の花に隠るなる。狐住むなる塚の草。紅葉ば染めて錦塚は。是ぞと言ひ捨てゝ。塚の内にぞ入りにける。夫婦は塚に入りにけり。 (中入)

「男鹿の角の束の間も。く。寝られん物か秋風

の。松の下臥夜もすがら。声仏事をやなしぬらん。

く。

ツレ「如何に御僧。一樹一河の流れを汲むも。他生の縁  
ぞと聞く物を。ましてや值遇のあればこそ。かく  
宿りする草の枕の。夢ばし覚まし給ふなよ。あら  
貴の御法やな。

後ジテ「あら有難の御弔ひやな。二世とかねたる契りだに  
も。さしも三年の日数つもる。此錦木の逢ひ難き。

法の值遇の有難さよ。いでく姿を見え申さん。

今こそは。色に出でなん錦木の。

地「三年は過ぎぬいにしへの。

シテ「夢又夢に。今宵三年の值遇に。今ぞ帰るなれと。

地「尾花が本の思草の。陰より見えたる塚の幻に。顯  
はれ出づるを御覧ぜよ。

シテ「いふならく。奈落の底に入りぬれば。刹利も首陀  
も変はらざりけり。かはらざりけり。あら恥かし

や。

ワキ「不思議やなさも古塚と見えつるが。内はかゝやく  
灯の。影明らかな人家の内に。機物を立て錦木  
を積みて。昔を顕はす粧ひなり。是は夢かや現か  
や。

ツレ「かきくらす心の闇にまどひにき。夢現とは世人定  
めよ。

シテ詞「実にや昔に業平も。世人定めよといひし物を。夢

現とは旅人こそ。よくく知ろしめさるべけれ。

ワキ「よし夢なりとも現なりとも。早々昔を顕はして。

夜すがら我に見せ給へ。

シテ「いでく昔を顕はさんと。夕陰草の月の夜に。

ツレ「女は塚の内に入りて。秋の心も細布の。機物を立  
てゝ機を織れば。

シテ詞「夫は錦木取り持ちて。さしたる門をたゝけども。

ツレ「内より答ふる事もなく。ひそかに音する物とて

は。

シテ  
「機物の音。」

ツレ  
「秋の虫の音。」

シテ  
「聞けば夜声も。」

ツレ  
「きり。」

シテ  
「はたり。」

ツレ  
シテ  
「ちやう。」

地  
「きりはたりちやうく。きりはたりちやうく。  
機織松虫きりぐす。つゞりさせよと鳴く虫の。  
衣の為めか勿わびそ。おのが住む野の千種の糸の。  
細布織りて取らせん。」

地クリ  
「實にや陸奥の。けふの郡の習ひとて。所からなる

事業の。世に類ひなき有様かな。」

シテサシ  
「申しつるだにはゞかりなるに。猶も昔を顯はせと  
の。」

地「御僧の仰せに従ひて。織る細布や錦木の。千度百

夜を経るとても。此執心はよも尽きじ。

シテ「然れども今逢ひ難き縁によりて。

地「妙なる一乗妙典の。功力を得んと懺悔の姿。夢中に猶も顯はすなり。

クセ「夫は錦木を運べば。女は内に細布の。機織る虫の音に立てゝ。問ふまでこそなけれども。互に内外にあるぞとは。知られ知らるゝ中垣の。草の

戸ざしは其まゝにて。夜はすでに明けゝれば。すゞくと立ち帰りぬ。さる程に。思ひの数も積り来て。錦木は色朽ちて。さながら苔に埋木の。人知れぬ身ならば。かくて思ひも止るべきに。錦木は朽つれども。名は立ち添ひて逢ふ事は。涙も色に出でけるかや。恋の染木とも。此錦木をよみしなり。

シテ「思ひきや。榻のはしがきかきつめて。

地

「百夜も同じ丸寐せんと。よみしだに有る物を。せ  
めては一年待つのみか。二年あまり有りくへて。  
はや陸奥の今日までも。年紅の錦木は。千度にな  
れば徒に。我も門辺に立ち居り。錦木と共に朽ち  
ぬべき。袖の涙のたまさかにも。などや見々え給  
はぬぞ。さていつか三年は満ちぬ。あらつれなつ  
れなや。

地

「錦木は。

シテ

「千束になりぬ今こそは。

地

「人に知られぬ閨の内見ぬ。

シテ

「うれしやな。今宵鸚鵡の盃の。

地

「雪を廻らす舞の袖かな。く。  
(舞)

シテ

「舞をまひ。

地

「舞をまひ。歌をうたふも妹脊の媒。立つるは錦木。

シテ

「織るは細布の。

地

「とりぐさまぐの夜遊の。盃にうつりて有明の。

影恥かしやく。あさまにやなりなん。覚めぬさ  
きこそ夢人なる物。覚めなば錦木も細布も。夢  
も破れて。松風颯々たる朝の原の。野中の塚とぞ  
なりにける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第二輯」大和田建樹著